

このほかにも、龍口法難の直後、「御弟子が切られたり殺されたり追い出されたり、過料を科される者もあった」＊1

と、お祖師様のご晩年の弘安二年（一二七六年）に龍口、佐渡ご法難当時のことを回想して述べておられるように、お祖師様が佐渡にご流罪となると同時に投獄されたり、殺害されたり、鎌倉追放にあったり、相当の課金を取られた者もあったのです。

さらに、また、お祖師様が依智におられる間、鎌倉で律宗の僧侶で生き仏と崇められていた良観等の律宗、念仏宗の僧による謀略で起こされた殺人、放火などの犯人が「日蓮が弟子檀那」であると、二百六十人もの人々が処分の対象者としてリストアップされ、無実の罪に陥れられそうになったといわれているのです。＊2

このような理不尽の政界、宗教界あげての弾圧の嵐によって、能登（のと）坊、少輔（しょう）坊などの弟子、名越（なごえ）の尼、故郷の領家（りょうけ）の尼などは早速、退転しました。そればかりか、少輔坊などは文永八年九月十二日、平頼綱（たいらのよりつな）の軍勢とともに松葉ヶ谷の草庵に押しかけ、お祖師様を法華経勸持品のお経文の書かれている第五の巻で打ち据えたのでした。ユダはキリスト教だけでなく、お祖師様の弟子にもいたのです。

この前後のことはまた、後ほど詳しく記したいと思いますが、松葉ヶ谷において幕府がお祖師様を召し捕ったのは律宗の良観、あるいは念仏者、真言宗の僧たちがしきりに幕府に讒奏（ざんそう）したためで、特に行敏（ぎょうびん）が良観（1217～1303）＊3、良忠＊4、道教＊5の代理人（雑掌）として訴状を提出したのがきっかけです。行敏は然阿良忠の弟子で念仏者、法条長時が真阿に帰依して創建した浄光明寺に住していた僧で、もっぱら良観等の手先としてお祖師様に法論を挑み手紙をやりとりしてお祖師様の封じ込めを計り、失敗すると幕府の権力によって処断しようとしたのです。また、彼らは「上郎、尼ごぜん」すなわち大奥の女性を通じてしきりにお祖師様の処罰を訴えたのです。そのような画策が功を奏して、ついに九月十日に侍所の所司、平頼綱がお祖師様を召喚し尋問した結果、十二日、申（さる）の時（午後四時）頃、平左衛門尉頼綱の直接指揮によるお祖師様の召し捕り（逮捕）が行われたのです。

以上のような経過で龍口、佐渡のご法難は進行し、さらに教団全体に対する大弾圧が行われたことは先ほどから述べているとおりです。このような弾圧が続きますと、だんだん御弟子と信者の中にも、このご信心と教えの師であるお祖師様に対して疑いがわき上がってくるのです。なるほど龍口法難では光り物が顕れるという大変な現証によって、とうとう、お祖師様の首を切ることはできずに不思議を目の当たりにした人々も、日が経つにつれて現実には佐渡に流されていったお祖師様のこと、また、連座して罪に問われて法難にあっている御弟子檀那のありさまを見て、次第に疑念を募らせるのです。

「現世は安穩で来世もよい境遇に恵まれるといわれている法華経のご信心をしていて、なぜ法難のような良くない、つらいことが起こるのか。これは、いったいどういうことか。また、この先はどうなるのか。日蓮聖人は龍口で斬首は免れられたものの、依然、罪人と

このほかにも、龍口法難の直後、「御弟子が切られたり殺されたり追い出されたり、過料を科される者もあった」＊1

と、お祖師様のご晩年の弘安二年（一二七六年）に龍口、佐渡ご法難当時のことを回想して述べておられるように、お祖師様が佐渡にご流罪となると同時に投獄されたり、殺害されたり、鎌倉追放にあったり、相当の課金を取られた者もあったのです。

さらに、また、お祖師様が依智におられる間、鎌倉で律宗の僧侶で生き仏と崇められていた良観等の律宗、念仏宗の僧による謀略で起こされた殺人、放火などの犯人が「日蓮が弟子檀那」であると、二百六十人もの人々が処分の対象者としてリストアップされ、無実の罪に陥れられそうになったといわれているのです。＊2

このような理不尽の政界、宗教界あげての弾圧の嵐によって、能登（のと）坊、少輔（しょう）坊などの弟子、名越（なごえ）の尼、故郷の領家（りょうけ）の尼などは早速、退転しました。そればかりか、少輔坊などは文永八年九月十二日、平頼綱（たいらのよりつな）の軍勢とともに松葉ヶ谷の草庵に押しかけ、お祖師様を法華経勸持品のお経文の書かれている第五の巻で打ち据えたのでした。ユダはキリスト教だけでなく、お祖師様の弟子にもいたのです。

この前後のことはまた、後ほど詳しく記したいと思いますが、松葉ヶ谷において幕府がお祖師様を召し捕ったのは律宗の良観、あるいは念仏者、真言宗の僧たちがしきりに幕府に讒奏（ざんそう）したためで、特に行敏（ぎょうびん）が良観（1217～1303）＊3、良忠＊4、道教＊5の代理人（雑掌）として訴状を提出したのがきっかけです。行敏は然阿良忠の弟子で念仏者、法条長時が真阿に帰依して創建した浄光明寺に住していた僧で、もっぱら良観等の手先としてお祖師様に法論を挑み手紙をやりとりしてお祖師様の封じ込めを計り、失敗すると幕府の権力によって処断しようとしたのです。また、彼らは「上郎、尼ごぜん」すなわち大奥の女性を通じてしきりにお祖師様の処罰を訴えたのです。そのような画策が功を奏して、ついに九月十日に侍所の所司、平頼綱がお祖師様を召喚し尋問した結果、十二日、申（さる）の時（午後四時）頃、平左衛門尉頼綱の直接指揮によるお祖師様の召し捕り（逮捕）が行われたのです。

以上のような経過で龍口、佐渡のご法難は進行し、さらに教団全体に対する大弾圧が行われたことは先ほどから述べているとおりです。このような弾圧が続きますと、だんだん御弟子と信者の中にも、このご信心と教えの師であるお祖師様に対して疑いがわき上がってくるのです。なるほど龍口法難では光り物が顕れるという大変な現証によって、とうとう、お祖師様の首を切ることはできずに不思議を目の当たりにした人々も、日が経つにつれて現実には佐渡に流されていったお祖師様のこと、また、連座して罪に問われて法難にあっている御弟子檀那のありさまを見て、次第に疑念を募らせるのです。

「現世は安穩で来世もよい境遇に恵まれるといわれている法華経のご信心をしていて、なぜ法難のような良くない、つらいことが起こるのか。これは、いったいどういうことか。また、この先はどうなるのか。日蓮聖人は龍口で斬首は免れられたものの、依然、罪人と鎌倉に念仏を流行させた。

＊5 道教 道阿と称す。鎌倉名越、新善光寺に住す。北条一族の名越氏の帰依を受け、念仏者の「主領」といわれていた。九品寺派の諸行本願義を奉じ、天台的傾向を帯びていた。良観の師、叡尊より受戒。良観とも親しく交流する。